



警告 のニュースレター「角笛」

発行日：2013年12月発行（第44号）

発行：警告の角笛出版

価格：フリーペーパー（無料）

角笛 HP: <http://www.geocities.co.jp/Technopolis-Mars/5614/>

目次：

◎巻頭メッセージ「ギリシャの角」 エレミヤ

◎証「知っていたのなら」 E3

◎お知らせコーナー 「黙示録セミナー」

< 巻頭メッセージ >

「ギリシャの角」 by エレミヤ

本日はギリシャの角というタイトルでダニエル書8章から見ていきたい、と思います。

< ダニエル書の位置付け >

そもそもダニエル書はどのような書なのでしょう？この書は明らかに終末の日、艱難の日への備え、心備えが語られた書です。この書を通して終末の日に関して重要なヒント、教えが与えられます。たとえば、ダニエル3章で、ダニエルの3人の友がバビロン王の下で像を拝まないために艱難に会うことが描かれています。

この記述は、以下の黙示録の日、獣の像すなわち、反キリストという人間を拝さないために艱難に会う日、すなわち、大艱難の日を説明しヒントを与える記述です。

黙示録 13:15 それから、その獣の像に息を吹き込んで、獣の像がもの言うことさえもできるようにし、また、その獣の像を拝まない者をみな殺させた。

その艱難時代の日に我々クリスチャンは獣の像、すなわち反キリストという個人を崇拜せよ、との命令に対してどのように対応するのが正しいのでしょうか？

その答えは、このダニエル書の3人の信仰の勇者の様に、「もしそうでなくても、王よ、ご承知ください。私たちはあなたの神々に仕えず、あなたが立てた金の像を拝むこともしません。」と像すなわち、反キリストを拝することを拒否することが正しいのです。

その日、ダニエルの友たちは火の炉に投げ込まれましたが、しかし、神の子の様な方が現れ、奇跡的に助かりました。同じく、艱難時代の我々も反キリストを拝まないとき、苦難に会うでしょうが、その艱難の後、神の子であるキリストの奇跡的な介入すなわち、再臨がある、ということがこのダニエル書の箇所でも語られている終末の日へのメッセージなのです。

この書のどこにも、炉の苦難の前に神が奇跡的に介入して、ダニエルの3人の友が天に挙げられ、苦難が終わった後、もう一度降りてきた、などとの艱難前の教理に沿った記述はありません。逆に彼らが艱難に会った後、神の子が奇跡的に介入することが描かれているのです。そうです、艱難後に神の助けがあるのです。

ですので、2段階携挙説すなわち、艱難前だの中だのの教えは、ダニエル書の神のメッセージと異なる、反聖書的な教えであることがこの章を通して、よくわかるのです。確かに終末に関

「ギリシャの角」 by エレミヤ

して大事なヒントがこの書を通して与えられています。

さて、このことは、ダニエル本人の苦難に関しても同じです。ダニエル6章で、ダニエルは王以外のどのような神にも祈ってはいけない、との禁令に従わず、結果、獅子の穴に投げ込まれました。この章では、人である王に対して祈ることが強制されていますが、艱難時代においても、恐らく人である反キリストへの祈りが強制されるでしょう。

さて、そのダニエルの苦難の日の前に神の子が下りてきて、奇跡的にダニエルを苦難の日から免れさせた、そして、その苦難が終わったあと、再度神の子がダニエルを地上に降ろした、などの記述はこの書にはありません。

逆に神に忠実だったダニエルは獅子の穴に投げ込まれ艱難を通過する、しかし、その後、神は御使いを遣わし、獅子の口を封じたことが書かれています。すなわち、艱難後、神の奇跡的な助け、介入があることがこの章にも描かれているのです。すなわち、ダニエル書は明確に終末の聖徒への助けは艱難の後に来ることを語っているのです。

いかに艱難前だの中だの、聖徒は艱難に会わないとの教えが非聖書的な教えであるか、わかります。かくのごとく、ダニエル書は、終末の日の大事なテーマや、問題に関して、必要な光や、答えを与える書なのです。

<ギリシャの角>

さて、本日のテキストであるダニエル8章から、ギリシャの角ということを見ていきましょう。

“ダニエル8:3 私が目を上げて見ると、なんと一頭の雄羊が川岸に立っていた。それには二本の角があって、この二本の角は長かったが、一つはほかの角よりも長かった。その長いほうは、あとに出て来たのであった。”

この章の特徴はメデイアペルシャから、終末に至る長い時代を全て、雄羊そして雄やぎという2種類の動物で、描写している、ということです。それ以外の獣は登場しません。この2匹の動物をもって8章の全ての記述が説明されているのです。

さて、それでは、ダニエル8章で語られている羊、やぎの意味合いは何なのでしょう？ その第一義的な意味合いは羊はメデイアペルシャ、やぎは、ギリシャを現します。

しかし、聖書は黙示録に、表にも裏にも文字の書かれた巻物と描写されているように、表の意味合いだけでなく、裏の意味合いもある書なので、その裏の意味合いをも理解していきたいと思うのです。

<羊は正しいクリスチャン、やぎは反キリスト的なクリスチャン>

羊、やぎが描かれている聖書の箇所が他にあります。以下のことばです。

“マタイ25:32 そして、すべての国々の民が、その御前に集められます。彼は、羊飼いが羊と山羊とを分けるように、彼らをより分け、
25:33 羊を自分の右に、山羊を左に置きます。”

ここでは、羊はキリストにつく民、やぎは反キリスト的な民であることが記述されています。ですので、ダニエル8章の羊、やぎの記述の裏の意味合いは羊はキリストにつく民、そしてやぎはそれに反対、妨害する反キリスト的な民と理解できるのです。8章はその攻防の歴史を描いたものと理解できます。この視点でこの章を順に見ていきましょう。

ダニエル8:3 私が目を上げて見ると、なんと一頭の雄羊が川岸に立っていた。
それには二本の角があって、この二本の角は長かったが、一つはほかの角よりも長かった。
その長いほうは、あとに出て来たのであった。”

ここに2本の角を持つ羊が出てきます。
子羊の様な2本の角を持つ獣は黙示録に記載されています。

“黙示録13:11 また、私は見た。もう一匹の獣が地から上って来た。それには小羊のような二本の角があり、竜のようにものを言った。”

私たちは以前、この獣は獣化したキリスト教会であり、2本の角はキリスト教会の2大勢力、カソリックとプロテスタントである、と理解しました。その理解に基づくなら、このダニエル書の羊もキリスト教会、その2本の角はキリスト教会の2大勢力と理解できます。

“8:4 私はその雄羊が、西や、北や、南のほうへ突き進んでいるのを見た。どんな獣もそれに立ち向かうことができず、また、その手から救い出すことのできるものもいなかった。それは思いのままにふるまって、高ぶっていた。”

さて、ここには、その羊、キリスト教会の快進撃が描かれています。それは、「西や、北や、南のほうへ突き進んで」いきます。歴史的な教会の宣教も、まず西であるヨーロッパから進んでいっていますので、この記述と合致します。さらにここでは、羊は東には進んでいけません。それは、アジア（東）へ福音を語ることを聖霊が禁じた、との使徒行伝の記述と符合します。

事実福音は西向きに伝わり、アジア、東は長い間、福音から遠ざけられてきたのです。その福音、キリスト教の広がりはいかにも大きいものであり、西洋を始めとした世界を変えました。「どんな獣もそれに立ち向かうことができず、また、その手から救い出すことのできるものもいなかった。」との記述の通りです。

そして、その結果、「それは思いのままにふるまって、高ぶっていた。」すなわち、キリスト教会は、高ぶり、自分勝手な歩みをするようになったのです。このことは、歴史的な事実であり、キリスト教会は、その発展とともに、この世的な権力をも持つようになり、高ぶった存在となりました。ローマ法王はこの世的な力を

持つようになり、この世の王にまさる絶大な権力を持つようになります。ヨーロッパの国の王がローマ法王に破門され、許しを請うために裸足で戸外で立っていたというカノッサの屈辱という事件はキリスト教会のこの世における絶大な権力を物語る良い例です。

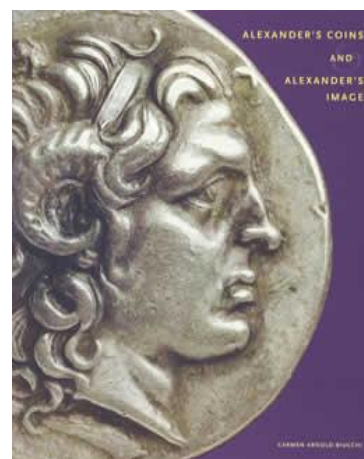
“8:5 私が注意して見ていると、見よ、一頭の雄やぎが、地には触れずに、全土を飛び回って、西からやって来た。その雄やぎには、目と目の間に、著しく目だつ一本の角があった。”

8:6 この雄やぎは、川岸に立っているのを私が見た。あの二本の角を持つ雄羊に向かって来て、勢い激しく、これに走り寄った。”

さて、その羊、キリスト教会に対抗する勢力として、やぎすなわち、ギリシャが立ち上がります。

8:7 見ていると、これは雄羊に近づき、怒り狂って、この雄羊を打ち殺し、その二本の角をへし折ったが、雄羊には、これに立ち向かう力がなかった。雄やぎは雄羊を地に打ち倒し、踏みにじった。雄羊を雄やぎの手から救い出すものは、いなかった。”

このやぎ、ギリシャが羊、キリスト教会を打ち殺すことが書かれています。やぎの意味合いは何でしょうか？私の理解では



ギリシャ帝国を建てあげたアレクサンダー大王

西洋文明の発祥の地、ギリシャを基点にする西洋合理主義、科学万能主義、知性主義といったものでしょうか。これらの人の考えや、知性を優先するギリシャ由来の西洋合理主義は、キリスト教と相容れません。逆にそれは、キリスト教を殺し、地に打ち倒す、すなわち、この世につくものとさせます。そして、このことは、現実に歴史的に起きていることです。

西洋で広まったキリスト教ですが、しかし、その長い歴史の中で、教会は西洋由来の合理主義、科学万能主義、知性主義に倒され、そのもっとも大事な部分さえ、破壊されつつあります。キリストの復活や、奇跡は、西洋文明を崇拝するヨーロッパの人々により、否定され、非科学的なもの、迷信として、排斥されています。今の神学校では、ギリシャ由来の西洋文明の影響の下で、聖書やキリストの教えは攻撃されています。復活もキリストの奇跡も非科学的であると否定されつつあるのです。また、西洋由来の科学主義に毒されたローマ法王は、進化論は科学的なので否定できない、と語っています。要するに創世記の神による天地創造の話は非科学的な迷信に過ぎない、と彼は語っているわけです。

かくのごとく、キリスト教の教えを破壊するもの、その根本的な土台を破壊するもの、それは、仏教でもイスラム教でもなく、しかし、ギリシャ由来の西洋文明であり、科学やら、人間の知性やらを崇拝する西洋合理主義であることがわかるのです。

“ 8:8 この雄やぎは、非常に高ぶったが、その強くなったときに、あの大きな角が折れた。そしてその代わりに、天の四方に向かって、著しく目だつ四本の角が生え出た。”

この節の記述、「天の四方」とは、「4つの風」「4つの息」とも訳せます。ですので、これは風、息すなわち聖霊に関するたとえと理解できます。いわんとしていることは、ギリシャ、西洋文明は、聖霊の働きをも阻害、攻撃するようになる、ということです。このことは、事実

であり、西洋由来の科学万能主義に毒された神学校や、教会の中では、聖霊の働きは軽視され、重視されなくなっています。まさしく、ギリシャ由来の西洋文明は4つの風、聖霊の働きをとどめるものとなっているのです。

8:9 そのうちの一本の角から、また一本の小さな角(強い角:70人訳)が芽を出して、南と、東と、麗しい国とに向かって、非常に大きくなっていった。”

さて、ここでは、一本の強い角(70人訳)が登場します。この国こそ、終末の主演である獣の国であり、それは、具体的には、世界随一の軍事力を持つ、獣の国アメリカです。

この国、アメリカに関して、このダニエル8章は、その国がギリシャの末裔であることを明確に強調しています。このことを通して何を聖書はいわんとしているのでしょうか？

それは、終末の獣の国、その国の特徴、また、その獣の国による終末の日のキリスト教破壊の方法、それが、ギリシャの角、ギリシャの方法で行われる、ということです。

具体的にはその艱難の日に、正しいクリスチャンを迫害するアメリカの論法、方法、論拠は、聖書の教え、キリストの教えは、非科学的である、迷信的である、知性に合わない、常識に合わない、だから、カルトである、そういった論法になることが想像できるのです。

一例として最近アメリカでは、同性愛への理解、ということがさかんに強調されています。同性愛、性的マイノリティとは、生まれ持った固有の性質であり、罪や、罪悪とは関係はない。そのような「科学的に証明された」性的マイノリティの権利や、利害を侵すことは、非科学的であり、そのように主張するクリスチャンはカルトであり、彼の宗教は狂信的な異端の宗教である、といった論理です。その論理に基づき、オバマ大統領は米国において、同性愛者の結婚を合法と宣言しました。

同性愛を認める、そのことは、アメリカ、獣の国においては、全く合法、合理的、科学的である、そう彼は判断したわけです。したがってそれに反対する聖書的なクリスチャンは、ギリシャ由来の科学や理性、知性を否定する、カルト信者である、ということになります。

このような論理は、ますます強調され、いずれ、教会において、聖書に基づき、同性愛の罪を指摘する牧師や教師は「非科学的な迷信にこりかたまつたカルト」と認定され、罰せられるようになるでしょう。この動きはすでにアメリカにおいて始まっており、同性愛者の集会に反対し、聖書をもとに語ったクリスチャンが逮捕されています。

“8:10 それは大きくなって、天の軍勢に達し、星の軍勢のうちの幾つかを地に落として、これを踏みにじり、”

ギリシャの末裔であるアメリカが大きくなり、その結果、「天の軍勢」すなわち、天的クリスチャンにも影響を及ぼし、その信仰を脅かすようになることが書かれています。「星の軍勢のうちの幾つかを地に落として、これを踏みにじり」る、すなわち、天的なクリスチャンをこの世に引きずり落とすことが描かれています。このことは実現しており、アメリカ由来のテレビ番組だの、この世的な風潮だのは、キリスト教会に浸透し、教会をこの世的なものに変えています。近頃はアメリカの教会では、聖餐式をU2などのこの世的な歌手の下で行ったりしています。

8:11 軍勢の長にまでのし上がった。それによって、常供のささげ物は取り上げられ、その聖所の基はくつがえされる。”

軍勢とは何でしょう？クリスチャンは新約のイスラエルですが、イスラエルとは神の兵士という意味なのです。すなわち、軍勢とは新約のクリスチャンの集まりをさすことばなのです。そして、軍勢の長、すなわち、クリスチャンのトップ、王とは誰か？という、それは、一人しかいません、他でもない王であるキリストで

す。しかし、恐るべきことには、ギリシャの末であるアメリカから、反キリストが出現し、彼がキリストに代わって全世界の教会を治めるようになります。それにより、常供のささげもの、すなわち、正しいメッセージは取り上げられ、聖所の基、すなわち、キリスト教会の根本教理、教えはひっくり返されるようになります。

8:12 軍勢は渡され、常供のささげ物に代えてそむきの罪がささげられた。その角は真理を地に投げ捨て、ほしいままにふるまって、それを成し遂げた。”

そのギリシャの角の末裔であるアメリカにより、聖書やキリスト教会の真理は地に投げ捨てられ、この世的な常識が教会で語られるようになります。いわく、死んだキリストが復活するなどは、非科学的であり受け入れられない、いわく、2000年前の人間が今の世に再度再臨するなどという教理は、非合理的であり、教会の教えから排除する、そのような事態になるのです。

そして、それらの冒涇や真理への攻撃の論拠として、ギリシャ由来の科学主義、合理主義、知性主義が大いに用いられることを知しましょう。ダニエル8章の語るメッセージ、すなわち、やぎであるギリシャの角により、羊、キリスト教会は倒され、生命を奪われていく、このように語るダニエル書の近未来への警告のメッセージに耳を傾けましょう。終末における主のみこころを行いましょ。

—以上—



同性愛に反対する路傍メッセージを行い逮捕されたアメリカのトニー・ミアノ氏

今まで幾度かにわたって、「みことばを実践しましょう」といった内容について話をさせていただいたかと思いますが、そのことに関して再度、いえ、再々度、いいえもっとかも知れませんが、神さまからの語りかけを受けたように思いましたので、証をさせていただきます。

9月のセミナーの証でも、同じようなテーマで話をさせていただいたのですが、最近礼拝のメッセージを通して、「これは神さまがクリスチャンに語っている！」と思われる箇所が示されました。どこの箇所かと言うと、下記みことばです。

参照 I テモテへの手紙1:13

1:13 私は以前は、神をけがす者、迫害する者、暴力をふるう者でした。それでも、信じていないときに知らないでしたことなので、あわれみを受けたのです。

「私は以前は、神をけがす者、迫害する者、暴力をふるう者でした」と書かれているように、以前の、いわば神に召される前のパウロはこのような歩みをしていました。もちろんパウロはもともと神の民として歩みをしていたのですが、しかし、聖書のことばを守らない、いわゆるみことばを行わない神の民だったのです。ただし、下線の部分にあるように、「**知らないでしたこと**」のゆえに、神さまからの憐れみをパウロは受けることができましたのです。そして礼拝のメッセージの中でエレミヤ牧師が、「しかし、知っているのなら、憐れみを受けづらいので、気をつけていきたい」ということをひと言ポツリおっしゃっていました。その時に、「なるほど！」と、改めて霊的に目が開かれました。それと同時に、「やっぱり、そうかあ」と思いました。

話は突然、後の世に飛びますが・・・当たり前のことですが、今生きていて後の世に行き行ってキリストに会ったなんていう人はいないと思います。時々、天国へ行って来ましたとか、地獄を見たとか、そういう話を聞くことはありますが、しかし聖書にはっきりと、「**だれが天に上り、また降りて来ただろうか。だれが風をたな**

ごころに集めただろうか。だれが水を衣のうちに包んだらうか。だれが地のすべての限界を堅く定めたらうか。その名は何か、その子の名は何か。あなたは確かに知っている。」(箴言30章4節)と書いているように、天に上って、降りて来たのはキリストだけなので、天国や地獄へ行って戻って来た人は、誰もいないはずなのです。なので、後の世がどんなものか？は想像するしかないですよ。当然、天国と地獄(火の池)はありますし、私たちは神さまの判断によっていずれかに入ります。ただ、現時点で聖書からはっきりと分かっていることがあります。それはⅡコリント人への手紙にも書いているように、私たちは善であれ、悪であれ、神の御前に出て肉体にあってした行為に応じて報いを受ける、つまり裁かれるということです。

そして、その時に何をもとに裁かれるのか？と言うと、これも前に申し上げましたが、「聖書のみことば」に基づいて裁かれるのです。その時に、神さまの御心を知っていたのか、そうでなかったのか、ということもそうですが、もし、知っていたにもかかわらず、応じなかった場合、厳しく裁かれてしまうのではないかと思います。つまり私たちがこの世に生きている間、みことばや御教え、いわゆる真理に対してどんな風に対応したか？ということ、私たちが考えている以上に神さまの前にはとても大事なことなのではないかと思います。もちろんこの世の異邦人のように、真理を知らずに、みことばを全く無視していても裁かれてしまいますが、クリスチャンのように、聖書のことばを知っていてもなおかつ実践しなかった場合に、さらに厳しく裁かれてしまうのではないかと思います。少し厳しい言い方をすれば、自分の意思で教会に行き行ってメッセージを聞いたり、そして聖書を読んだり、あるいは書物やインターネットの文章や音声メッセージ等を通して真理に触れながらも、みことばを実践

しないときに、神さまからの怒りを招いてしまうのでは？と、思います。これは私が御霊に感じたことですが、ある意味、真理を見たり、聞いたりした時点で、「責任」が生じるのでは？という風に思います。それこそ前にも話しましたが、主人(キリスト)の心を知りながら、御心を行わなかったしもべはひどくムチ打たれるということがルカの福音書に書かれているように、真理を知りながらも、しかし応じない時に、厳しい取り扱いを神さまから受けてしまうということは肝に銘じて歩んだほうが良いのでは？と、思います。教会に行ってメッセージを聞いたり、もしくは書物やインターネット等を通して真理に触れる、それはそれで尊いことではありますが、しかし、それと同時に、「責任」が発生するというのも、事実なのでは？と思います。「責任」とは、真理に触れたのなら、真理に従って歩むということです。

繰り返して語りますが、真理を知っているのと、そうでないのとでは、この世においてもそうですが、後の世における扱いが変わるということは、正しく理解しておいたほうが良いと思います。私も人様のことをとやかく言える立場ではありませんが、しかし日々の祈りの中で主の御心を行っていくことができるように、祈り求めています。およばずながらも、祈りの中で聖霊さまから力をいただいて、教えられたことは少しずつでも従っていくように心がけています。また、罪や間違えていることがあったら主に示しをいただいてすぐに悔い改めに導いていただけるようにという風にも、祈り求めています。それこそ、受けた御教えにすべてとどまればなあという思いで日々、歩みをしています。もちろん個々の人のそれぞれの判断なので私なんかとやかく言うことではありませんが、もし、真理を聞いたり、見たり、あるいは理解したのでしたら、ぜひ、実行に移してしていきたいと思います。どんなみことばでも、実践していくなら神さまは喜んでくださいますし、それはそのまま恵みや祝福につながっていきますし、しかも生涯にわたって続けていくなら、永遠の御国に招いていただけますので、おすすめいたしま

す。

逆に、どこまでも主の意向に沿わない歩みが続けていくときに、天の御国に入ることがかなり危ないものとなりますのでくれぐれも気をつけていきたいと思いません。主の意向に沿わないのなら、一体誰の意向に沿っているのでしょうか？それは「サタン」の意思を行う歩みの可能性があります。当然のことですが、はじめからキリストを信じない、あるいは拒否しているノンクリスチャンやサタンは後の世を継ぎません。そのまま「火の池」(永遠の苦しみ)に入れられます。なので、もし、神さまの御心を行っていないかも知れないと思われましたら、直ちに方向を変えていきたいと思いません。もし、方向を変えないなら、サタンやノンクリスチャンと一緒に「火の池」に入れられてしまいますので、そんなことは何かが何でも回避していきたいと思いません。そうなんです、私たちの主であるイエスさまだけが唯一御国に連れて行ってくださいますので・・・ですから天の御国に誰を入れるか入れないかの決定権を持っているイエスさまに対して、決して反発したり、みことばを無視したりして、御国に入るのをミスすることのないように心がけていきたいと思いません。ゆえに、この方のおっしゃることにいつもいつも従っていきたいと思いません。最後にみことばを読んで終わりにします。

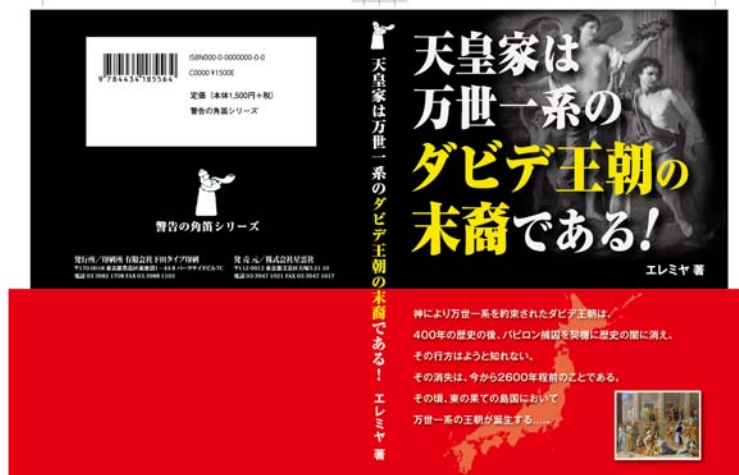
33:5 角笛の音を聞きながら、警告を受けなければ、その血の責任は彼自身に帰する。しかし、警告を受けていれば、彼は自分のいのちを救う。

エゼキエル書33章5節

今回も大切なことを語ってくださった神さまに、栄光と誉れがありますように。

—以上—

<お知らせコーナー>



- ◆神により永続を約束され、万世一系が決して途絶えないことを約束されたダビデ王朝は、400年の歴史の後、バビロン捕囚を契機に歴史の闇に消え、その行方はようと知れない。
- ◆全能の神、聖書の神の堅い約束、「ダビデには、イスラエルの家の王座に着く人が絶えることはない。」との約束は破られ、万世一系は、果たして途絶えてしまうのか？
- ◆バビロン捕囚により、ダビデ王朝が行方不明となったのは、今から2600年ほど前のことである。
- ◆その頃、東の島国において、万世一系の王朝が誕生する。
- ◆この王朝、皇紀2600年を誇る万世一系の天皇家こそ、ダビデ王朝の正当な後継者ではないのか？
- ◆人種、言語、文化、習慣、歴史、あらゆる面において、天皇家とダビデ王朝には、類似性がある

エレミヤの新刊。「天皇家は万世一系のダビデ王朝の末裔である！」

定価：1500円+消費税。12月1日発売。

ご注文の方は以下まで、連絡下さい。

警告の角笛出版： fax: 020-4623-5255, メール truth216@nifty.com